



西澤 豊氏


 連合駿台会報

 No.327 平成28年5月15日発行
 発行・編集 連合駿台会

 発行人 広報委員長・齋藤柳光
 編集人 事務局・矢嶋まゆ子
 〒101-0052 千代田区神田小川町三三二
 明治大学「紫紺館」内
 電話 (〇三) 三二九六一四七四七
 印刷 有限会社 美創

連合駿台会三月例会

「通信記者四十二年を振り返って

—日本の政治の現在地—

(株)時事通信社代表取締役社長 西澤 豊氏

連合駿台会平成二十八年三月の例会を、三月十六日(水)十八時より、明治大学「紫紺館」三階会議室で、西澤豊氏をゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、山口政廣会長から次のような挨拶がありました(挨拶主旨)。

十一月の大統領選を控え、民主、共和両党の候補者指名争いが佳境を迎えているが、今後の日本の行く末を考えた上でも、誰がアメリカ大統領になるかは重要なことだと思ふ。四年に一回行われるこの選挙はアメリカ独特のもので、現在は各党が大統領選挙人の獲得競争を行っている。そして七月にそれぞれの党大会で候補者が指名され、十一月八日

に投票、来年一月二十日に新大統領就任というプロセスだが、一年半くらいかけて行われる。かなり長期間にわたるので、この間、アメリカ国内でも重要政策は進めにくく、休暇状態になる。TPPも苦勞してまとめたが、今の選挙演説を聞いていると、両党とも「反対」ということで票集めをしているようだ。

日本における総理大臣選びは間接投票で、われわれは衆参両議院の議員に投票して、その両院議員が決める。一方、ご承知のようにアメリカは上院・下院が決めるのではなく、各州で獲得した選挙人の総数で決まる。その総数は五百三十五人(上院百人、下院四百三十五人名を足した人数と同数)にコロンビア特別区の三人が加わる。ちなみに上院は各州二人ずつで五十州・百人、下院の数は人口比率で決められている。選挙人の獲得競争をしなければならぬと同時に、アメリカには州ごとに法律があり、選挙についても州に登録する必要はあるが、今のところ二大政党だけは立候補を希望すれば、自動的に登録されるのが慣例となっているが、その他の党は推薦人を一定数集めないと登録できない。そういうハンディがあることもあり、民主・共和党以外から大統領を選出することはハードルが高く、さらに全州に選挙人を登録するとなると、資金面、党員数の上でもなかなかきつものがあり、どうしても二大政党から選ば

れることになってしまふ。実際には他の党（アメリカ立憲党、アメリカ緑の党、リパタリアン党など）も候補者を立てているようだが、マスコミが問題にするのは、二つの政党に限られてしまふのだ。

二大政党のうち、基本的には民主党は大きな政府の運営を目指し、政策的には所得分配に力を入れ、増税志向だといわれる。一方、共和党は小さい政府で経済成長のほうを有視し、減税志向であるというように、大きく方針が分かれる。ところが世界的に見ると、外交、信用、経済、さらに難民の問題等々、国の方向性に対して国民が不満を鬱積させている傾向が強い。となると広報や政策はこの人たちに受けるほうが勝ちやすいわけで、これをうまくすくい上げた人が勝利する可能性がある。そういう意味では、話題のトランプ氏は非主流で、そのアウトサイダー的発言は元気があがるが、発言の内容を聞いてみると、民主党的でもある。今は人気が出ているが、最後は選挙人の判断になるので、獲得人数と実際の選挙人の動き、党大会などがポイントになるかと思う。日本にも影響の強い大統領選挙なので、是非注目いただき、ご自分なりのお考えを持っていただけたらと思う。

今日は時事通信社の西澤社長にご講演をいただくが、有意義なお話が伺えると、楽しみにしている。

当日の講演の主旨は以下の通りです。

三木総理に始まり村山総理まで

まず時事通信社というのはどういう会社なのかを説明したい。一九三六（昭和十一）年、新聞聯合社と日本電報通信社が合体して、国策の同盟通信社が設立される。敗戦後の四五（昭和二十）年、GHQの命令が下る前に自ら解散して、株式会社時事通信社と社団法人共同通信社が発足、昨年十一月一日、会社創立七十周年を迎えた。時事通信社は同盟通信社からいわゆるコマースシャルサービス（官庁・商社・金融機関にニュースを配信するサービス）を、共同通信社はマスメディアサービス（新聞社へのニュース配信）を引き継いだわけだ。その後、時事通信社もマスメディアサービスに参入して、今はこの二つの通信社体制になっている。一方、電通というのは日本電報通信社の広告部門が分かれて、戦後のテレビブームに乗って今の巨大な企業になった。したがって時事通信社も共同通信社も電通の大株主である。

時事通信社という名前は、新聞社と違って紙面がないので、なかなか名前を覚えてもらえない。今でこそネットでニュースが配信されているので、若い人にはかなり知られているが、私が入社した頃は「どこの電気屋さんだ？」と聞かれるような笑い話もあった。

時事通信社入社から現在まで

入社1974年~1999年

1974年 4月 時事通信社入社
出版局世界週報編集部
1976年 5月 編集局政治部
1976年 8月 首相官邸クラブ
1977年 4月 霞（外務省）クラブ
1979年 1月 平河（自民党）クラブ
1979年 5月 横浜支局
1982年 4月 本社政治部、平河クラブ
1984年 12月 防衛庁クラブ
1986年 9月 平河クラブ
1987年 10月 官邸クラブ
1988年 6月 野党クラブ
1988年 9月 官邸クラブ
1989年 9月 ソウル特派員
1992年 6月 本社政治部
官邸クラブサブキャップ
1992年 10月 平河クラブサブキャップ
1993年 4月 野党クラブキャップ
1993年 7月 与党クラブキャップ
1994年 8月 官邸クラブキャップ
1994年 10月 政治部次長（デスク）
1999年 4月 長野支局長

2002年~現在

2002年 4月 本社出版局世界週報編集長
2004年 4月 横浜総局長
2006年 6月 本社経理局長
2008年 6月 取締役
財務経理・システム開発担当
2009年 6月 取締役
総務・労務・法務・情報企画管理担当
2011年 6月 取締役
総務・労務・法務担当
2012年 6月 代表取締役社長
内外情勢調査会会長
地方行政調査会会長
中央調査社会長
2013年 6月 電通社外取締役（兼）

社員は八百五十五人、その他契約社員や派遣社員、嘱託などを入れると千人ちよつとの規模で、本社は二〇〇四年に東銀座（以前東急ホテルがあった場所）に移転した。国内の取材網は七十八カ所に支社・総支局があり、海外では二十八支局を展開している。創業以来、「世界の動きを日本へ、日本の声を世界へ」のキャッチフレーズを守ってきた。

さてここからは、本日の主要テーマ「日本の政治の現在地」ということでお話しさせていただきます。前ページの表は、私が通信社でどういう仕事をしていたかである。

まず入社二年目で、首相官邸クラブに配属され、三木総理の首相番になるが、これは政治部の成り立て記者が着くポストで、総理が起きてから寝るまでくっついて回り、日本の政治がどう動いているかを体で覚えるということだ。私が配属された時、国内はロッキード事件一色で、七月に田中首相が逮捕された。三木さんはロッキード解明に全力を上げると言っていたが、三木政権の生みの親ともいえる椎名悦三郎さんが「三木ははしゃぎすぎだ、惻隱の情がない」と言っていて、三木おろし^①が始まる。そこで解散によって局面を打開しようとしたが、結局、年末に任期満了で総選挙が行われ、自民党は敗北し、政権は福田赳夫首相に引き継がれた。

その後七七年には霞クラブに行くが、ちょうど日中平和友好条約の締結交渉が佳境に入った時期で、条約交渉というのは取材合戦になる場なので、そこで鳩山威一郎・園田直の二代の外務大臣を取材した。二年後、この条約が締結され、中国から鄧小平氏が来日するのを見届けて、平河クラブに移った。ここはいわば政治部の花形で、精鋭が集まり、それぞれの派閥ごとに担当記者が付いて、政治

家の動きをフォローしていた。当時は大平正芳政権だったので、大平派担当兼齋藤邦吉幹事長番になった。その後横浜支局を経てまた平河クラブに戻って、河本派の担当となる。

八二年には鈴木善幸総理が退陣することになり、総裁選びは、実質的には河本さんと中曽根さんの争いだったが、この時のことは大変思い出に残っている。二年間河本派を担当、次は防衛庁クラブに移る。当時は加藤紘一さんが防衛庁長官で、この時に全国の自衛隊基地、アメリカの主要基地を視察して回った。これにより、日本人には理解し難いが、「抑止力 (deterrent)」というものが何なのか？ ということがよくわかった。当時、日本はP3Cという高価な対潜哨戒機をたくさん購入したが、これはソ連の潜水艦から日本を守るため、そういうことをしたお蔭で日本周辺には戦争が起きず、最終的にはソ連が崩壊するという結果を迎えた。軍事力はムダだという考え方が日本では強いようだが、抑止という観点では大変重要だと思う。

二年後の八六年、再び平河クラブに戻って田中派の番記者を務めるが、すでに角栄さんは病に倒れており、中曽根さんの後継をどうするかということが問題になっていた。結局、竹下派（経世会）が旗揚げされ、その時には田中派内で大変な抗争もあったが、竹下さんが中曽根さんの指名を受けて総理にな

る。その後は官邸クラブで小沢一郎官房副長官番をやったが、時を同じくして組合の委員長になったので、仕事を軽減してもらったため、野党クラブに移った。

八八年九月、昭和天皇が下血され、以降は崩御のアラート体制に入り、それから一月の崩御まで、首相官邸で順番に泊まり込む日々が続いた。八九年にはソウル特派員、三年後に帰国してからは官邸クラブ、平河クラブのサブキャップを経て、九三年には野党クラブキャップになるが、この時は政治改革が最大の争点になった。野党が宮澤内閣不信任案を提出し、自民党の一部、小沢さんや武村さんらが賛成に回ったので、不信任案が可決された結果、解散・総選挙となり、自民党は敗北して、八党派による細川連立内閣が誕生した。そうになると、記者を増員はしたものの野党クラブがそのまま与党クラブになるわけだが、この一年が大変な年だった。牛肉・オレンジの農産物の自由化、政治改革、福祉税など、問題が山積しており、毎日のように夜遅くまで政局原稿に追われ、血尿が出る経験までしたことは今でも忘れられない。

九四年八月に官邸クラブキャップになった時は村山総理で、APECの首脳会議に取材団の団長として同行した。こう振り返ってみると、最初に政治部に来た時は三木総理、出先の最後が村山総理というのも、何かの因

縁かな……、と思っている。それからは様々なところを転々として、二〇〇六年に本社に戻って経理局長になり、その後はこのような経歴で経営に携わって、現在に至っている。

衆参選挙の結果が教えること

次に選挙のことに触れると、参議院選挙結果では、一九四七年四月二十日に第一回選挙が行われて以来、四十二年後の八九年七月二十三日、第十五回目にして、初めて自民党は参院の過半数を失う。土井たか子社会党委員長のもとで「マドンナ旋風」が吹いて、山が動いたと言われた。消費税、リクルート疑惑、宇野総理のピンクスキャンダルの三つが原因となって、自民党は歴史的な敗北を喫するのだ。その後参院選では「九年ジンクス」というものがある。まず九八年七月十二日の第十八回選挙でも自民党は敗け、橋本首相は退陣に追い込まれる。さらに九年後の二〇〇七年七月二十九日、第一次安倍内閣のもと、ここでは結党以来初めて参院第一党から陥落する。これが衆参のねじれを生み、「きめられない政治」の大きな要因ともなった。

そしてまた九年後の今年、不確定ながら七月十日だといわれているが、この結果は、私は自民党はそんなに敗けないのではないかと思う。また衆院とのダブル選挙になるともしきりに噂されるが、私見としてもそれもないと思う。その理由は、一つは憲法改正を争

点にしてダブル選挙をして、衆参で三分の二を獲得するなど思っていること自体がおかしいからだ。公明党はもともダブル選挙には反対だし、そんなことを争点にすれば、野党ではそれこそ憲法改正反対統一戦線のようなものを組む可能性もある。三分の二を取ればなければ敗けだし、今の議席を減らせばそれもまた敗北なので、果たしてこれほどのリスクを冒すだろうか……と思う。そしてもう一つは、来年の四月に控えている消費税増税を止めるなどと、この七月に言えるのかということだ。これでは今からアベノミクスが失敗だということを宣言するようなもので、現段階でそれを争点にして戦うのだろうか？ という気がしている。

衆議院選挙結果では、一九五八年から自社五五年体制の選挙になっていたので、自民党はずっと過半数を維持してきた。しかし先ほども述べたように七六年、戦後初の任期満了選挙になり、敗北して三木首相が退陣する。七九年の選挙では、悪天候も手伝って自民党は敗け、四十日抗争が始まる。翌八〇年、やはり明治の先輩である飛鳥田一雄社会党委員長が出した不信任案に自民党からも同調者が出て可決され、いわゆる「ハプニング解散」が起こった。六月二十二日、初の衆参同日選挙になったが、選挙戦の途中で大平首相が亡くなったため、その弔い合戦になって

自民党が大勝する。八六年には、中曽根首相の「死んだふり解散」で七月六日に衆参同日選挙になるが、やはり自民党が圧勝した。

注目されるのは九三年七月十八日の政治改革選挙で、宮澤内閣不信任案を受けて解散、自民党が敗北して細川連立内閣ができ、自民党一党支配に終止符が打たれる。そして九六年からは小選挙区比例代表並立制も導入された。二〇〇五年九月十一日は「小泉郵政解散」で、それまでに民主党は徐々に票を伸ばして、〇〇年、〇三年と二大政党の形ができつつあったが、それを打ち壊して自民党が圧勝した。郵政民営化に反対する議員に刺客を立てて、まさに小泉劇場型政治と言われた。

逆に〇九年になると、民主党が三百八議席を獲得して圧勝し、自民党は結党以来初めて衆院第一党から陥落する。ところが次の二年の選挙では、民主党批判票がすべて自民党に入って、いわば民主党がコケた形の選挙になり、自民党が大勝して政権に復帰した。そして一昨年の一四年には安倍総理が消費税の延期を争点にして、一二年と同じような票を獲得している。

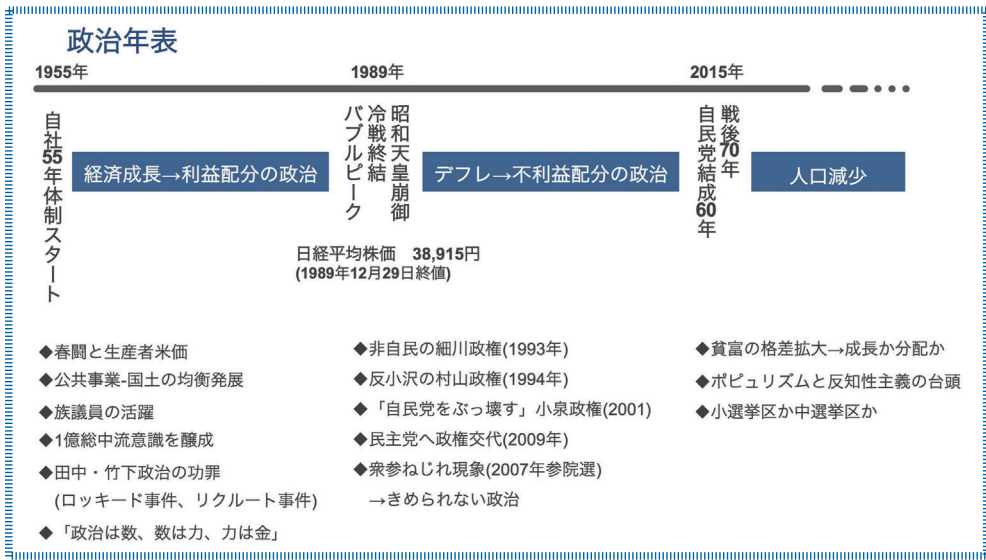
このように最近の選挙はオセロゲームのように行ったり来たり、民主党は選挙に負けるたびにオタオタしている感じで、党名を民進党に変えたりと、残念な感じが否めない

い。この背景には、これも本学の先輩である大野伴睦さんの「猿は木から落ちてでも猿だが、政治家は選挙に落ちるとただの人だ」という言葉ではないが、選挙に落ちるのが怖くて仕様がなから、いったん野党になると右往左往し始める。しかしこれは長年にわたり政権を担う自民党も同じ有様だったので、日本の政治風土なのかな、という気がする。政党基盤が弱いから、落選した時に政治家を続ける、支えるだけの基盤がないからではないかと思っている。

戦後の歴代首相の在任期間を見ても、最長は佐藤栄作首相の2798日、二番目は吉田茂首相の2616日（ただし二期計）、三番目は小泉純一郎首相の1980日、四番目が中曽根康弘首相の1806日。安倍晋三首相はいま二期目だが、任期が一八年の九月までである。ここまでやると小泉さんを抜き、さらに東京オリンピックまで延長となれば、佐藤さんを抜いて最長になる可能性もある。

吉田さんでいえば、高校生の時、戦後唯一の民間人の国葬だった思い出だけだが、「吞舟の魚、支流に遊ばず（＝舟をひと呑みにするような大きな魚は小さな支流では泳がない）」という言葉は、自分も一回でも言ってみたくも思った記憶がある。中曽根さんは、先輩記者でもよく言う人はいなく、作家・平林たい子が「カンナ屑のようにペラペ

ラ燃えすぎる」と形容したのは有名だが、経済がよかったことは大きかったと思う。小泉さんも安倍さんも同様である。
政治体制に見る三つの区切り
最後に三つの政治の区切りを図式化したのでご覧いただけたらと思う。



一九五五年というのは、「自社五五体制」がスタートした年で、戦後の政治体制ができあがった年である。八九年は昭和天皇が崩御されて、冷戦が終結した年で、バブルがピークを迎え、大納会の終値で、日経株価が三万八千九百五十円の最高値をつけた。二〇一五年は戦後七十年、自民党結成六十年の節目の年でもある。

五五年から八九年は経済成長期で、利益配分の政治だった。その後バブルピークからすぐにデフレになったわけではないが、九七年を境に、デフレ社会、失われた十年、二十年などといわれるが、不利益配分の時期で、負担を国民に押し付けたわけだから、これでは誰がやっても政治的には難しかったと思う。

やがて小泉さんが出てきて、文字通り自民党をぶっ壊したが、二〇〇七年の衆参ねじれ現象で、きめられない政治になっていく。その後に安倍さんが登場して、アベノミクスで成長か分配か？で成長に力点を置いたことでマインドとムードを変えたと思う。

今後気をつけるべきは、山口会長が先ほどおっしゃられたように、ポピュリズムと反知性主義の台頭だろう。トランプ現象、大阪の橋下現象もそれに近い。不満が高まっていくと、ヘイトスピーチなどで解消することには警戒する必要があるだろう。加えて人口の減少。二〇四〇年には今より二千万人の人口

減となり、五〇年に日本の人口は一億人を割ることになる。その防止には、スマートシユリンクⅡ賢く小さくなることが必要だと思ふ。経済成長率とは大まかに言えば人口増加率プラス生産性向上率であるから、人口増加が望めない以上、そんなに成長は望めないから、スマートシユリンクしなければ、財政再建もできない。自助・公助・共助というが、これからは自助が大切になっていくだろう。また選挙区のあり方も、小選挙区が中選挙区か？ いずれは見直さなければいけない時代が近づきつつあるような気がしている。

◆明大ニュース

●二〇一六年度入学式を挙行

八千二百三十三人が明大生に

明治大学は四月七日、二〇一六年度入学式を日本武道館（東京都千代田区）で挙行。見ごろの桜を濡らす雨が降りしきる中、夢や希望を胸に抱いた八千二百三十三人（学部生七千三百二十一人、大学院生九百十二人）の若人が、「明大生」としての新たなスタートを切った。

●土屋恵一郎新学長が就任

土屋恵一郎教授（法学部）が四月一日、前学長の任期満了に伴い、明治大学長に就任した。任期は二〇二〇年三月三十一日までの四

年間。学校法人明治大学寄附行為施行規則第五条の規定に基づき、昨年十二月十二日、連合教授会が土屋教授を次期学長候補に銓衡。三月二十八日の評議員会で就任が正式決定した。

土屋恵一郎（つちや・けいいちろう）

一九七〇年明治大学法学部卒業、一九七七年同大学院博士課程単位取得退学。一九七八年明治大学法学部助手、一九九三年同教授。法学部長、教務担当常勤理事など歴任。六十九歳。（法哲学、近代イギリス思想史）

●副学長に八氏が就任

学長の職務を補佐する副学長に、小林正美理工学部教授（総合政策担当）▽千田亮吉商学部教授（教務担当）▽越川芳明文学部教授（学務担当）▽小川知之総合数理学部教授（研究担当）▽竹本持農学部教授（社会連携担当）▽牛尾奈緒美情報コミュニケーション学部教授（広報担当）▽大六野耕作政治経済学部教授（国際交流担当）▽間宮勇法学部教授（スーパーグローバル大学創成支援〔SGU〕担当）の八氏が四月一日付で就任した。

●教員人事

新役職者が決定

任期満了に伴う教員の新役職者が四月一日付で就任した。

法学部は青野寛教授、情報コミュニケーション学部は大黒岳彦教授が新学部長に就任。牛丸元経営学部長、横田雅弘国際日本学部長は再任された。また、大学院長には坂本恒夫経営学部教授、専門職大学院長には青井倫一グローバル・ビジネス研究科教授が新たに就任し、三林宏法科大学院長は再任された。以上七氏は、学校法人明治大学寄附行為第十七条第二項第一号の規定により、同日付で職務上の評議員となった。

その他、教務部長には千田亮吉商学部教授、学生部長には越川芳明文学部教授、学長室専門員長には間宮勇法学部教授が就任した（三氏とも副学長兼務）。

任期は、専門職大学院長と学生相談員長が二〇一七年三月三十一日、副教務部長が二〇二〇年三月三十一日、それ以外は二〇一八年三月三十一日まで。

●連合父母会

優秀学生九十九人に「学部長奨励賞」

連合父母会が優秀な学生を表彰する「学部長奨励賞」の授賞式がこのほど、各学部の新入生総合ガイダンス会場などで行われ、受賞者九十九人に賞状と記念品が手渡された。

この賞は、学部二年生（経営学部のみ三年生）までの課程を修了した学生の中から、学業成績優秀者を表彰するもの。在学生の学

業の励みにしてもらおうとともに、新入生の勉学に対する動機づけの一助となることを目的としている。

●平成二十七年司法試験総合一位合格者に

明治大学法学部長特別表彰第一号授与

法学部は三月十二日、平成二十七年司法試験で総合一位合格を果たした古川翔さん（二〇一三年法卒）に、第一号の「明治大学法学部長特別表彰」を授与した。同賞は、学術、文化、スポーツ、社会貢献その他の分野において、特に顕著な功績を挙げた法学部卒業生を顕彰するもので、このほど創設された。古川さんは、付属明治中学校・明治高等学校で学び、二〇一三年に法学部（神田英明ゼミ・民法）を卒業後、他大学の法科大学院に進学。一年次に司法試験予備試験に合格したが、「総合一位で合格するため」に翌年の司法試験を見送り、満を持して挑んだ平成二十七年司法試験において、千八百五十人中「総合一位」「論文一位」の成績で、見事合格を勝ち取った。

●OB社長

▽ANA Cargo（空運業） 〓外山俊明氏

氏（一九八三年商学部卒・五十五歳）

▽いちよし証券（証券、商品先物取引業・東証一部） 〓小林稔氏（一九八二年商学部

卒・五十七歳）

▽大和総研ホールディングス（シンクタンク） 〓草木頼幸氏（一九八〇年商学部卒・

五十八歳）

▽上田ハロー（証券、商品先物取引業） 〓

中村信之氏（一九八八年政経学部卒・五十一歳）

▽札幌丸井三越（小売業） 〓伊藤達哉氏（一

九八〇年政経学部卒・五十八歳）

▽自動車部品工業（輸送用機器） 〓浅田和則

氏（一九七九年工学部卒・六十歳）

▽篠崎屋（食料品・東証二部） 〓関根雅之氏

（一九八九年商学部卒・五十一歳）

▽大和ハウスリフォーム（建設業） 〓村井勝

行氏（一九八四年法学部卒・五十四歳）

●OB市長

▽岡山県笠岡市長（四月十七日投票）

小林嘉文氏（無所属①、一九八三年商学部卒・五十五歳）

●OB町長

▽千葉県横芝光町長（無投票当選）

佐藤晴彦氏（無所属③、一九七九年商学部卒・五十九歳）

▽長野県南木曾町長（無投票当選）

向井裕明氏（無所属①、一九八四年文学部卒・五十六歳）

●長野県で高校生約百九十人に特別授業

明治大学は三月十日、広報事業の一環で、各地域の高校生に大学での学びを広く伝えることを目的とした、「高大連携特別授業」を長野県・佐久長聖高校で開催。同校の一・二年生約百九十人が、大学の教育・研究の一端に触れた。

今回は、国際日本学部の小林明准教授が文系クラスの生徒約百十人に、総合数理学部の福地健太郎准教授が理系クラスの約八十人に対し、それぞれ六十分間の特別授業を実施。

●図書館の相互利用に関して

順天堂大学と調印

相互の教育研究資源の有効活用を目的に、明治大学図書館（林義勝図書館長 〓文学部教授）と、順天堂大学学術メディアセンター（図書館、渡辺純夫センター長 〓同大医学部消化器内科主任教授）は三月十四日、両図書館の相互利用（四月一日〜）に関する調印式を行った。昨年十二月に両大学間で、教育・研究活動の交流や連携の推進に関する「包括協定」が締結されたことを受けたもの。今回の調印で取り交わされた確認書には、一方の大学の教職員証や学生証等を持参すると、相手方の図書館への入館、資料の利用が可能となることや、必要に応じて連絡会を開催することなどが盛り込まれている。

●世界に広がる協定校

四十八カ国・地域二百八十四大学と協定

明治大学は、新たに海外の五大学と大学間協力協定を締結した。協定校はこれで四十八の国と地域、二百八十四大学となった。
〈四月十二日現在〉

●「中野区グローバル戦略推進フォーラム」

明治大学が幹事会メンバーを務め、賛同団体に名を連ねる中野区グローバル戦略推進協議会は三月二十八日、「中野区グローバル戦略推進フォーラム」を中野キャンパス・五Fホールで開催した。同協議会は、中野区内の産業や経済の国際競争力強化に向け、産学公金が一体となったビジネスの活性化や活動基盤整備を推進するため、二〇一五年に設立。田中大輔区長が代表を務める。

●「スマートキャリアプログラム」

三期生入校式

明治大学の生涯学習機関・リバティア카데미は四月九日、履修証明プログラム「女性のためのスマートキャリアプログラム」の三期生（二〇一六年度春期）六十五人の入校式を、駿河台キャンパス・グローバルホールで挙行了。このプログラムは、結婚・出産・育児等で離職して家庭に入った女性が、仕事に復帰して社会にもう一度踏み出すきっかけ

となることを目的に、二〇一五年度に開講。昨年十二月には、文部科学省の定める「職業実践力育成プログラム」にも認定された。

●二〇一六年度リバティア카데미

開講オープン講座「映画のなかの御茶ノ水」

リバティア카데미は四月九日、中村実男商学部教授を講師に迎え、「映画のなかの御茶ノ水 よみがえる風景の記憶」と題する二〇一六年度開講オープン講座を駿河台キャンパス・リバティホールで開催。御茶ノ水界隈がシーンに登場する映画作品の数々を通じて、戦前からの街や風景の変遷をたどった。

●群馬県富岡市と

相互協力に関する基本協定を締結

明治大学は三月二十八日、群馬県富岡市との間に「相互協力に関する基本協定」を締結した。締結式は、世界遺産・富岡製糸場の首長館（ブリュナ館）で行われ、本学からは福宮賢一学長、藤江昌嗣社会連携機構長（社会連携担当副学長）ほか、関係者が出席。富岡市からは岩井賢太郎市長らが出席した。

協定は、人的、知的、物的資源の交流を図ることで地域社会の発展と人材育成につなげるのが狙いであり、企画展を富岡製糸場で開催するほか、本学の生涯学習機関・リバティア카데미の講師を富岡市関係者が務め

るなど、連携を強めていく。

●ガバナンス研究科

学生有志が、政策形成を考える会、発足

シンポジウムを開催

専門職大学院ガバナンス研究科（公共政策大学院）の学生有志が、日頃抱く問題意識を提起・共有する場を設け、さまざまな立場の価値観に触れる活動を行うことを目的に「ガバナンス研究科政策形成を考える会」を発足。このほど、「LGBTって、何？」と題するシンポジウムを駿河台キャンパス・グローバルフロントにて開催した。

このシンポジウムには、LGBT（性的少数者を限定的に指す言葉）の当事者として活動する豊島区議・石川大我さん、中野区議・石坂わたるさん、明治大学・松岡宗嗣さんの三人を招いた。

●第二十二回マスコミ交流会を開催

マスコミ関係者との交流や情報交換を目的に、明治大学は三月二十三日、第二十二回マスコミ交流会を駿河台キャンパス・リバティタワーで開催。今回は「企業・地域との連携によるアクティブラーニングの実践」をテーマに、教員・学生による事例報告やパネルディスカッションなどが行われた。

●「前へ」故・北島忠治ラグビー部監督

メモリアルコーナーが新潟県上越市に

体育会ラグビー部の礎を築き上げ、同部、ひいては明治大学の精神でもある「前へ」の名言を今に残した故・北島忠治監督。そのゆかりの品々を展示するメモリアルコーナーが三月十二日、北島監督の故郷である新潟県上越市の「リージョンプラザ上越」に設けられた。日本ラグビー界に一時代を築いた北島監督の功績をたたえとともに、その存在を市内外に広く知ってもらうことを目的に、没後二十年にあたり、上越市と市教育委員会が設置したもの。

●植村直己冒険賞（第二十回）

マッシャーの本多有香氏が受賞

体育会山岳部OBの世界的冒険家、故・植村直己氏（一九六四年・農学部卒）の名を冠した「植村直己冒険賞」（兵庫県豊岡市主催）の第二十回受賞者発表が駿河台キャンパス・紫紺館で行われ、カナダ在住のマッシャー（犬ゾリ使い）・本多有香氏が受賞した。

同賞は、植村氏の精神を継承し、日本または世界各地の極地・山岳などにおいて、人間の可能性に挑んだ創造的で勇氣ある行動をとった（業績を残した）個人や団体を、植村氏の故郷である豊岡市が表彰するもの。

●アメリカンフットボール部

福島県内で三日間のボランティア活動

体育会アメリカンフットボール部は三月一日～三日の三日間、福島県内で農作業を中心としたボランティア活動に従事した。これは、明治大学ボランティアセンターと日本財団学生ボランティアセンターとの協定に基づき実現したもので、アメリカンフットボール部からは、部員・スタッフ・OBの有志四十五人が参加した。

●石田祥子講師（理工）

文科大臣表彰・若手科学者賞受賞

科学技術に関する研究開発、理解増進などで顕著な成果を収めた者をたたえる「平成二十八年度科学技術分野の文部科学大臣表彰」において、理工学部機械工学科の石田祥子講師（先端数理科学インスティテュート〔MIMS〕研究員）が「若手科学者賞」を受賞した。四月二十日、文部科学省で行われた表彰式では、受賞した若手研究者九十九人を代表して、石田講師が富岡勉文部科学副大臣より賞状を受け取った。

●和泉キャンパスで

シートベルトの安全体験イベント

春の全国交通安全運動最終日の四月十五日、「シートベルトの安全体験しません

か？」と題する交通安全イベントが、和泉キャンパス・第一校舎前で実施された。学生や教職員を主な対象に、高井戸警察署、武蔵境自動車教習所の協力のもと企画されたイベントで、自動車乗車時の交通事故から命を守るため、後部座席を含めた全座席でのシートベルト着用の徹底などを呼びかけるのが目的。道路交通法では、運転席・助手席はもちろん、後部座席もシートベルト着用が義務づけられている。イベントでは、シートベルト横転体験装置（シートベルトコンビンサー）という縦横三百六十度回転する装置に、学生らがシートベルトを着用して乗り込み、山道をドライブ中に崖から転落したという想定のもと、実際にシートベルトがどのように働いているのかを約百人が体験した。

●連合父母会

二年連続日本一・女子ラクロス部を表彰

ラクロス全日本選手権大会で連覇し、二年連続の日本一に輝いた体同連女子ラクロス部の栄誉をたたえ、連合父母会は三月九日、駿河台キャンパスで同部の表彰式を挙行。川本正信会長から松本紗来良主将（商4）らに、表彰状と「祝栄冠」の金一封が授与された。

女子ラクロス部からは松本主将と、主務の井口琴乃選手（農4）、オフェンスリーダーの横川蒔穂選手（法4）の三人が表彰式

に出席。

川本会長から「毎回違う試合展開で、何点取られてもあきらめない姿勢に感動した。新年度も日本一を目指して頑張ってほしい」と祝福と激励を受けた。

● 阪神ドラフト一位ルーキー

高山俊選手が活躍

東京六大学野球の通算最多安打記録（百三十一本）をひっさげ、ドラフト一位で阪神タイガースに入団したルーキー・高山俊選手（二〇一六年・文学部卒）が、期待にたがわぬ活躍を見せている。開幕戦からスタメンに名を連ねると、打率三割一分一厘、本塁打二本、さらには新人最多タイとなる三度の一試合四安打を記録（四月二十五日現在）。そのバットの先には、すでに新人王を射程にとらえている。

● 大学から応援団に校旗を貸与

明治大学校旗を大学から体育会応援団に貸し出す「校旗返還式・貸与式」が三月二十五日、駿河台キャンパス・リバティタワー二十三階岸本辰雄ホールで執り行われた。

渡邊海翔前団長（二〇一六年・農学部卒）から校旗の返還を受けた松橋公治学生部長（文学部教授）は「体育会の活躍は、オール明治の心の拠り所といっても過言ではな

い。その活躍を、陰ながら応援団が支えてくれている。したがって君たちは、オール明治の応援団である」と激励。細谷一誠新団長（政経4）に、校旗を貸与した。

あいさつに立った細谷新団長は「大学の象徴である校旗を掲げられることの誇りと責任を胸に、今年一年間活動していきたい」と、力強く誓った。

● スポーツ表彰式

国内外で活躍、十七団体九十三人をたたえ

二〇一五年度のスポーツ表彰式が三月二十五日、駿河台キャンパス・アカデミーコモンで催され、優秀賞・敢闘賞、特別表彰を合わせて十七団体、九十三人が表彰を受けた。国内外の大会で優勝するなど、各種スポーツで顕著な成績を残した体育会の団体・個人を表彰するもの。式には受賞者のほか、大学役員・役職者や、体育会各部の部長・監督らが列席した。

◆ 駿台トピックス

● 山田朝彦氏が日本芸術院賞を受賞

当会会員の山田朝彦氏（昭和四十一年・商卒）が、二〇一五年度の日本芸術院賞に、他の八人とともに選ばれました。心からお祝い申し上げます。なお授賞式は六月十三日に日本芸術院会館（東京都台東区）で開かれます。

山田氏から受賞のお喜びの言葉をいただきました。

*

去る三月二十四日、「優れた芸術作品をつくるなど芸術の分野で大きな業績をあげた人に贈られる二〇一五年度の日本芸術院賞に、彫刻家・山田朝彦『朝の響き』（昨年度・第二回改組新日展出品作）が選ばれた」と報道されました。授賞式は六月十三日に、日本芸術院で行なわれます。大変名誉なことです。が、日が経つに従って、賞の重さ、責任の重さも強く感じております。

紫紺館ロビーに『SEED』、神田駿河台・和泉・生田・中野のキャンパスに、創始者の像の碑を政策させてもらいました。母校に作品を設置させてもらえること、一〇Bとして大変うれしく、幸せなことです。

これからもさらに色々と経験し、勉強し、自分だけにしかできない造形の道を旅しようと思っております。

今後とも、どうぞよろしく応援お願いいたします。

山田 朝彦

【山田朝彦氏 略歴】

やまだともひこ

昭和十八年 旧朝鮮平安南道に生まれる
 昭和二十三年 広島県福山市（本籍地）に引き揚げる
 昭和四十一年 明治大学商学部卒業
 昭和四十五年 太平洋美術学校入校 彫刻を始める
 昭和四十七年 第二回日彫展「男」初入選
 昭和四十八年 第七十回太平洋美術展「女」初入選・文部大臣奨励賞受賞
 昭和四十九年 第六回日展「男」初入選
 昭和五十一年 日本彫刻会 会友
 昭和五十五年 日本彫刻会 会員
 昭和六十一年 日展 会友
 昭和六十二年 第十九回日展「雄」特選受賞
 昭和六十二年 第二十二回現代美術選抜展出品（文化庁主催）
 昭和六十二年 第二十二回日展「若人」特選受賞
 平成二年 第二十二回日展「若人」特選受賞
 平成四年 日展 委嘱



朝の響き 山田朝彦

平成六年 第二十四回日彫展 審査員
 第九十回太平洋美術展「蒼」安田火災奨励賞受賞
 第三十回日展 審査員
 平成十年 日展 会員
 平成十一年 第三十回日彫展 審査員
 平成十二年 第三十七回日展 審査員
 平成十七年 ワコー文化賞受賞（岡山市）
 平成十九年 第三十八回日彫展 審査員
 平成二十年 第四十一回日展「悠悠」会員賞受賞
 平成二十一年 第四十三回日展 審査員
 平成二十三年 日展 評議員、第四十四回日展「もれば」文部科学大臣賞受賞
 平成二十四年 ベストセレクション美術二〇一三出品（東京都美術館）
 平成二十五年 第四十五回日彫展 審査員
 平成二十七年 二〇一五年度日本芸術院賞「朝の響き」
 平成二十八年 公益社団法人日展 会員
 公益社団法人日本彫刻会 運営委員

●第九回オープンゴルフコンペを開催

第九回目になるオープンゴルフコンペが、四月十五日、当会の田村駿会員が理事長を務める山梨県・上野原カントリークラブで開催されました。残念ながら参加者はあまり多くありませんでしたが、好天に恵まれ、絶好のゴルフ日和となりました。



ペリア方式による成績結果は、優勝は石原道勝会員、準優勝は小島清治会員の昭和四十二年・政経卒コンビで、陶芸家の武内裕会員から寄贈された陶器が副賞として贈られました。第三位は西山武夫会員（昭和三十三年・商卒）、ベストグロは見事80で回った室井恵明会員（昭和六十二年・文卒）でした。

総務・事業委員会では、これからも年に二回程度オープンゴルフコンペを開催する予定ですので、奮ってご参加ください。

◆退会会員

（平成二十七年四月～二十八年三月）

井上善男（故人）、内田八郎（故人）、北本雅章、河野一英（故人）、佐藤壯之介、真貝達朗、高橋徹、宝井馬琴（故人）、田中茂生、谷慈義（故人）、中島御幸（故人）、西尾勝治、二宮忠（故人）、橋口隆（故人）、富士豊、矢澤澄道、湯本良太郎（敬称略）

◆三月例会出席者

青木孝、青木幹則、青柳勝栄、秋山隆敬、坏昭二、浅井宏、浅倉晴司、有賀隆治、池田一義、石川かおり、石川均、石橋良一、石原通勝、石原裕司、泉山和久、板橋光一、伊東正博、伊原敏雄、上西紘治、潮田伊佐夫、宇田川雄弘、大石哲也、大原幸男、大前実之、大村託現、大山卓良、加賀美猛、同ご友人、

笠井正弘、勝俣正義、金子圭太、柏森靖、苅部彰夫、河合秀二郎、河村博、北野大、木下重次郎、清本法弘、小山修、小山有彦、根田哲雄、斉藤弘之、斎藤柳光、坂田英夫、佐藤和正、佐藤健、佐藤仁、眞田瞳、椎名茂樹、志田憲彦、甚野捷、須貝栄、杉浦伸二、鈴木紘一、鈴木俊光、関孝夫、関根均、相臺志浩、武内裕、竹下衛司、同ご友人、武田宣夫、田村駿、天童美德（代理）、当山明彦、徳丸平太郎、富井征也、富水流孝二、中川敏洋、長瀬幸泰、中村豊、長吉泉、並木洋一、西崎誠次郎、西澤豊、西山武夫、二宮充子、野口昌宏、橋口隆二、長谷川進一、同ご友人、幡谷公朗、八丁地園子、馬場範夫、林威樹、樋口郁夫、同ご友人、日高憲三、平山英郎、同ご友人、榎野泰、松崎優子、摩尼和夫、宮下隆、宮本浩二、向井眞一、村岡健、室井恵明、山上雅隆、山口大介、山口政廣、山田朝彦、結城和正、弓野理恵、義江邦夫



【編集後記】

桜の季節も終わり、暖かく過ごしやすい春の陽気になったと思っていた矢先、そんな気持ち吹き飛ばすかのように、熊本地方を中心に震度7の地震が襲い、再び尊い命が失われました。余震もすさまじく、被害も拡大しているようです。天災は忘れた頃にやってくると申しますが、東日本大震災の傷がまだ癒えない中で新たな災害に接し、改めて災害は我々の身近にあるものだと思いが知らされます。今回の地震では東海大学の学生寮が大きく倒壊し、夢と希望に満ちた一年生を含む三名の方がお亡くなりになりました。将来のある若い命が残酷にも失われましたことに、とても胸が痛みます。被災されました皆様に謹んでお見舞いを申し上げます。

さていよいよ五月二十六日、二十七日の二日間、先進七カ国首脳会議・伊勢志摩サミットが行われます。日本で行われる先進国首脳会議は八年ぶり六回目になります。世界経済、政治外交問題、エネルギー対策などが主要なテーマとして話し合われることですが、やはり気がかりなのはテロ対策のように思います。フランス・パリやベルギー・ブリュッセルでの連続テロ事件では、多くの一般市民が犠牲になりましたのはまだ記憶に新しいところです。地震などの天災は防ぐことはできませんが、テロなどの人災は未然に防ぐことができます。テロ対策にぜひ力を入れていただき、またテロリストの温床になっている世界の紛争を解決するべく、しっかりと話し合ってくださいと思います。

まだまだ寒暖の差がごさいます。会員の皆様におかれましては、お風邪など召しませぬようご自愛いただければ幸いです。

（相臺 志浩）